

小倉豊文宛宮沢政次郎書簡集（一）

栗 原 敦

注記

- ・ 整理番号は年月順による通し番号。
- ・ 日付は本人記載のもの。以下封書・葉書の別、封緘・ノの別など。
- ・ 字空き、改行は編者が適宜判断した。
- ・ 判読不能の箇所、推定による部分は「（ ）」「？」によって示した。誤字と思われるものにママと付した他、該当箇所の下に「（ ）」により注記を添えた場合がある。
- ・ 本文のあとに、〈備考〉〈消印〉〈用箋〉〈筆記具〉、*その他の補足、注記を添えた。

ここに紹介を始める「小倉豊文宛宮沢政次郎書簡集」は、宮沢賢治の父政次郎と小倉豊文の交流の中で交信された小倉豊文宛の宮沢政次郎書簡である。現在残されているのは昭和十八年十一月十八日付封書から昭和二十五年六月四日付（尚書きは六月六日付）封書に至る五十九通で、今回は18の昭和二十年四月二十五日付封書までを紹介する。

宛先の小倉豊文については先に「小倉豊文の宮沢賢治研究」（本誌72号、平19・10）に紹介したとおりである（なお、そこで小倉の没年月日のうち日を一日と誤っています。謹んで一〇日に訂正いたします。73号、109頁参照）。堀尾青史氏（平成二年十一月六日没）を介して本資料をお預かりした経緯その他は、別に記すこととしたい。

1 昭和十八年十一月十八日・封書

過般は態々御來訪被下候処何の風情もなく失礼申上候

其後度々御懇書被下難有拝誦仕候

大東亜戦も漸く軌道に乗り大義名分正しく六国会議とまで相成り堂々の歩を進め候事ハ誠ニ歴史の盛観と被存御同慶之事ニ奉存候 此上とも銃後緩みなく遂行致させ度ものと存候

貴地ハ未だ農事取入れ等も御盛んの事と存候 此地方ハ秋に入り雨多かりし為め難儀致し候へ共昨今漸く八九分通り仕舞ひ最早雪待つ頃と相成り日増寒くも相成申候

尚武力戦ハ早晚片付き候ともどちらにか不平残念の思ひあれバ争ひの再発免れ難き事に候へバ今流行語の如く相成居候米英撃滅等の語ハ各自の持てる我儘思想を減する事に致さねバ何時になりても同じ事を繰り返すに至る事と存候 此点に就てハ我儘なる思想の撃滅ハ武力戦よりハ遙かに広大なる努力せねバならぬ事と存候

先ハ御懇書御挨拶旁々申上度 乍末筆愈々御清勝祈上候

匆々敬具

昭和十八年十一月十八日

宮沢政次郎

拝

小倉豊文様

侍史

〔備考〕封筒ナシ

〔用箋〕巻紙

〔筆記具〕墨、筆

2 昭和十九年二月十九日・封書〔封〕

〔表〕兵庫県姫路市

八代御茶屋三六三

小倉豊文様

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和十九年二月十九日

厳寒之候愈々御清康御事奉賀上候

陳者此度ハ久方振りに御懇書拝受誠に忝く拝誦仕候

別便御贈り被下候御文章も拝見仕候

今迄賢治に対する種々の御書面頂戴仕候も此度の貴台之御文章を殊に感深く拝読仕候 定て賢治も天上地上何れにあるも我れに知己の人ありと感激致居る次第と存候 実は私より申しても詩人等とハピツタリせぬ訳と存居りよくも此

時代に仏教徒となりて一生を通したと言ふ御評を受けしな

らバ本人の満足も左こそと存ずる次第に御座候

戦局も段々と險しく相成り候様被存候も如何なる事にも救
はあり燃へ盛る猛火も終熄するハ時の問題と存候へば爾後
の事ハ更に重要と被存此点にてハ米英式の考へ尚充ち居る
現下の状態にてハ問題にならず必ずや仏陀の教旨によらで
ハ長き平和ハ決して望み得られぬ事と存候 此点に於て貴
台の御研究ハ愈々重要にて是より光りを放つ御事と存候
何卒愈々御健勝之程祈上候
先ハ御礼旁々右申上度迄
勿々不尽

二月十九日

宮沢政次郎

小倉豊文様

侍史

尚眼悪しく候為め手許も定かならず御判読願上候 又東へ
御出之事あれば必ず御枉駕願上候

〔備考〕白二重封筒（中紙薄茶）

〔消印〕花〔？〕／19・2・19／岩手県

〔用箋〕浅黄野15行（左右に子持ち野）、薄手便箋四枚

〔筆記具〕墨・筆

3 〔昭和十九年〕二月二十六日・葉書

〔表〕兵庫姫路市

八代御茶屋三六三

小倉豊文様

岩手県花巻市

宮沢政次郎〔黒ゴム印、電話二〇八番／振替
仙台九一五六番〕

謹啓 寒さ尚厳敷候 益々御清健之御事賀上候

偕本日岩田徳弥殿来られ貴台より御所望之由申され全集の

六巻を清六より差上候

局面も愈々重大と相成候 国民ハ何を差置き応急手段ハ取
らねばならぬ事ハ申す迄もなく候 今ハ撃滅戦之一途より
致方なき事なるも直後如何に建設するかハ課せられたる大
問題と存候 先ハ

〔備考〕官製葉書

〔消印〕花〔？〕／1〔？〕2・25／岩手県

〔筆記具〕墨・筆

* 三月十一日付宮沢清六書簡あり

4 昭和十九年三月二十八日・葉書

〔表〕兵庫県姫路市

八代御茶屋三六三

小倉豊文様

岩手県花巻市

宮沢政次郎〔黒?ゴム印、電話二〇八番／振

替仙台九一五六番〕

三月廿八日

寒さ尚去り不申候処貴台益々御健勝之御事奉賀上候 偕過

般被仰下候撰折御文抄書昨日書写頼み置候もの出来上り候
に付早速書留にて送り上申候 右ハ農林卒業頃二十三才

頃之抄書と被存候 それ程深き造詣とも不被存候へば参考

ニ御覽被下度候 多分覚へ書程度のものと被存候

尚卷末の毛筆書ハ森惣一氏幸ひに來訪せられ候に付書いて

貰ひ候

年度代りと申し又時局柄定めし御多忙之御事と存候 愈々

御自愛御健祥之程〔一〕念上候 敬具

〔備考〕官製葉書

〔消印〕花〔卷〕／19・3・28／岩手県

〔筆記具〕ブルーブラックインク、ペン

* 本葉書は「撰折御文／僧俗御判」と題された翻刻用調査ノート（原稿用紙を袋綴じしたもの）の「一ウ」に貼付されている。

5 昭和十九年四月五日・封書〔ㄨ〕

〔表〕兵庫県姫路市

八代御茶屋三六三

小倉豊文様

〔裏〕四月五日

岩手県花巻町

宮沢政次郎〔ブルーブラックゴム印、電話

二〇八番／振替仙台九一五六番〕

〔宮沢清六書簡同封あり。墨・筆による添え書き署名あり〕

春未だ若きこの頃別て東北の地この辺ハ尚更の事毎日雪を見候 農業にハ新曆にて半月位遅れ居候様に候 左れと旧曆には潤年^{うるす}に候趣にて農家ハ悲觀せぬ様子ニ候 フランスハ此前の大戦三年目にして農作半減と聞き及^まびしに比べてハ我国の強味偉大なるものと存候へ共此上とも劣らせぬ様致させ度ものと存候 昨今の農家の肥料集めの努力や少なき労力をも間に合せて一生懸命の働らきハ誠に感

謝の外なく被存候

今日は又被懸貴意御惠贈被下候聖徳太子の御影像誠に御心籠められし珍〔蔵〕のものと存候

永く家宝と為致度厚く御礼申上候

今午前に国民学校を見舞ひ校長にも逢ひ子供達をも見て参り候 時局（病める時代の）不得止事とハ申しながら御来訪被下候時の御所感の如く天衣無縫の神に近き子供達が教育の名の下に小さくせられゆがめられ果てハ反逆方向にまで導かれし過去の事を思へバ善く教へれば之れに従ふと宣られし聖徳皇の今の世に殊更渴望致さるゝ次第に候

時局重大の言も漸く軌道にのり生活線にすつかり喰ひ込ミ今や少々の爆撃位にハ動揺せぬ心構へまてに見へ候事ハ喜ハ敷次第に候 死中に活ありと申せば尤も危く見へ候昨今ハ他日之幸ひに転ぜぬとハ申せぬ様にモ存候 窮通ハ天の道陰陽の転換も遠からぬ事かとも存候 弱音を吹かぬ用意管要と存居候

忍苦の程度ハ将来禍福の別れともなる事と忍ぶ外なき事とも存候 昭和の神風ハ国民一心に同船難破を乗切る覚悟より外なき様被存候 それにハ差別ある生活よりハ矢張邪まものゝ第一に被存候

何と申しても人生にハ第一の管要ハ心の置き処その置き処悪ければバ現世悪人となり三悪道の帰趣を招く事ハ疑ふ余地

もなく此意味に於て尤も造作なき善道に勧め入れんとして応ずるものなき散乱心の持主に對し血涙を以て諫め厲まし或ハ叱り或ハほめ多種多様の御慈悲を垂れられたる記録ハ尊く拝せらるゝ次第ながら今に至るも尚更愚痴蒙昧無眼人無耳人と云ふにふさわしき私共の如き存在ハ慚愧懺悔尚足る事なきを覺へ候

往来も随分窮屈に相成候由聞及候へ共反動にハ又反動もある事に候へバ何か御公用にて東京までの御出張もある節にハ何卒御枉駕被下度 東北の春も又満更のものに無之様に存候

先ハ不取敢御礼迄申上度 勿々不尽

四月五日

宮沢政次郎

小倉豊文様

侍史

尚過日送上候

抄書の奥に書きしハ抄書のまゝ森氏の写したるものに候

☆〔以下同封清六書簡〕

重ねての御懇書深謝申上てゐます。

本日は立派な御影像をわざわざお贈り下され、皆で大喜びを致し居ります。厚く御礼申上ます。

写真いろいろお送り申上度く存居りますが、時間も、紙も、

薬品も、少なくなりまことに残念ながら延びてゐます。どうか気長く御猶予下さい。少し面白いものを出来ましたらお目にかけ度く、信一郎君とも相談してゐます。

前に発行した「イーハトーヴォ」第四号同封いたしました。概ね散佚して残りなく、手元にあつた一枚ですが、若し「春と修羅」につき御参考にもとお送り申上ます。

父は私がいいたり、話したりすることを極度まで喜ばず、当時拙稿を変名で菊池暁輝君が載せたものです。父へは秘して下さい。

四月五日

宮沢清六

小倉豊文様

「文芸読物」四月号「森荘已池」氏作品御覧下さい。

〔備考〕白二重封筒（中紙薄茶）

〔消印〕花巻／19・4・5／岩手県

〔用箋〕政次郎部分、浅黄罫15行（左右に子持ち罫）、薄手便箋五枚。清六部分、薄ねずみ色罫14行、便箋二枚。

〔筆記具〕表書きおよび政次郎部分本文、墨・筆。清六部分、ブルーブラック・ペン。なお裏書き、ゴム印の前に四月五日の日付記入および後に清六署名添え書き（共に清六筆）は墨・筆。

6 昭和十九年七月二十八日・封書〔厳緘〕

〔表〕姫路市鷹匠町甲三四

小倉豊文様

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎（朱色印、電話二〇八番／振替仙台九一五六番）

昭和十九年七月二十八日

七月二十三日出之御懇書難有拝誦仕候

御地ハ旱天との御事東北地方ハ十四五日此方雨量多く水害汽車不通等も各地にあり農作物も不少被害有之候 昨年の此地方ハ旱り御地は多水と承り居候処天候も人事に連れて思ふに任すものハ無之候 只細長き我國の地理ハ一層片寄りせぬが有り難き事二候 御書面二被仰下候政局不安も一応片付き候も戦局不安ハ容易に解消せぬ事とハ存候へ共これも思ひ様にてハ今降り湧いた様なものハ一ツもなく一微塵之如き動きも一として因果の所応にあらざるることなきものと存候へバ矢張り慎しむべきハ銘々人心の幾微ミヅに外ならずと存候 緒戦の好果に心驕りし我方にハ緩みあり不意に狼狽せし彼にハ真摯の反動あり 今が其過程二もあらんか其次に総てハ我が意のまゝならんと心傲るものハそこが覆

没の種蒔きとなる事疑ひなきハ過去の種々の国史を見るまでもなく候 昭和維新以来の政治には善き確信もなく哲人も居らずなるまゝに輕佻に粗放にありませぬ資源をも顧みず衣食住奢り今日の事態に至りしハ遺憾極りなき事二ハ候もまさか七千万の国民ハ此ま、彼等の為めに亡はされ尽すものにてハ断じてあらざるも過去の蒔きしものを刈り取る為めかゝる流血の苦楚までも嘗めねばならぬ事千万惜しき次第に候 左りながら禍福ハ畢竟あざなへる縄思慮少なき人々に誤られ殊に米英より来れる甘味の中毒骨髓まで滲透せし人々にハ一段の苦味も試練も又止むを得ざるものと存候 只いつでも覺者ハ少なく候為め先憂の涙ハ絶へぬ事と被存候

私の知れる明治以来の人物にて日清戦争に心傲りし際にも支那ハ大国なり慢るべからずと警告せられしハ勝海舟翁にして後にハ加藤内閣の心なき支那压迫に対して深憂を抱きしハ原敬氏と被存候 何れも時勢に顧みられざりしも若し当時支那に対して理解ある心の結合あらば今日の情勢ハ全然變つた形方を取りたるに疑ひなき処に候 今日漸く民族自覺の端を開きしハ時勢も然らんが天意とも被存候 今にしてハ我国の立場一寸の逡巡も出来ず亞細亞民族に声の限り叫びかけ自覺を促すと共に彼等英米露等の人間にも鬼畜呼はり許りでなく（ふりかゝる火の子ハ当然掃ふの外なき

も）常にハ大帝の思召を体し四方の海皆はらからと云ふ呼び掛けや^マ体度も是非々々必要緊急の事と被存候 然らざれば民族意識の憎み合ひ丈けでハ百年経つても平和ハ来ぬ様に被存候 教育上の御立場よりも適切な御考慮を望む次第に候

次に四天王寺御参詣の御便りと種々の紀念品を御配慮御惠贈可下趣種々貴意ニ懸けられ御親切之御事難有奉謝上候 何れの世にも愚者ハ浜の真砂程多くとも智者ハ珠玉の程もなき事致し方なき世相と存候 切に太子の如き覺者の出現せられて世を濟はれん事万望至極ニ存候

無責任の批判ハ慎しまねばならぬ事に候へ共政治と云ふものハ六ヶ敷ものと云ふ事善く〳〵思ひ当り候 此頃地方にも不思議の現象見へ来り候 それハ町方など料理屋もなく美食も無くなりし為めか喰ひ過ぎによる病ハ殆どなく反対に在方にハ齒痛み等の多くなりし由 かゝる世相の中にも乏しき配給制度ハ喰ひ過ぎものにハ恵みとなり平生知らぬ砂糖など配給せられたものにハ不慮の病ひを求めたりする事天の配剤か自然の理法か只因果の恐るべきを知らしめらるゝのミに候 一方を圧へれば一方が膨れ暗ミ行為の始末悪しきも又理法的一面か奢侈の二字こそ天下治亂の別れ目と云はれし言も至理と被存候 此際何とか不足を云はずに素朴の昔に返り心身を剛健に鍛へ殊に今の窮屈を其ま、平

常となし百年続いても平然たる工夫致し度ものと存候

まづハ共通の憂ひハ憂ひとして明るい一面をも考へて見る
必要もある事と存候 以上申上候 それについても三界無
安の聖語や世間虚仮の真実言を体得して心の護りニ致した
き事ニ存候

乍末筆壮年の方々ハ負担も御苦勞も多く心身の過勞ハ殊更
せぬ様御要意管腎と被存候 愈々御自重祈上候

七月二十八日

匆々敬具

宮沢政次郎

拝

小倉豊文様

侍史

〔備考〕 白二重封筒、中紙薄茶

〔消印〕 「？」／「？」7「？」8／「？」「？」県

〔用箋〕 表裏印刷片面赤茶罫14行（三方子持罫）、中質紙事

務用箋。三枚（計六面）

〔筆記具〕 墨・筆

7 〔昭和十九年〕八月十日・封書〔*ル*〕

〔表〕 姫路市鷹匠町甲三四

小倉豊文様

〔裏〕 八月十日

岩手県花卷町

宮沢政次郎

炎暑尚嚴敷候折柄貴台益々御勇健ニ被為渉候御事大慶至極
ニ候 此地方ノ御天氣ハ御庇様ニテ自食程度ニハ恵マル、
模様ニ候へ共肥料ト手不足ノ為メ充分トッハ參ラズ多ク供
出ステ他ニ及ボス迄ニナレバ善イト念ズル次第ニ候 御地
方ノ旱天ハ誠ニ困ツタ事ニ候 何年モ忍バネバナラヌ世相
ト存候

偕此度ノ御懇書ハ誠ニ意味深ク拝誦仕候 東海ノ君子国ト
ハ昔ノ事摺レカラシノユダヤト交際中ニ箱入り息子（カ）
モ余リウブデハナク七十余年ニ余毒清算ニ大手術ノ苦惱ト
モ思ハレ共混乱ト動揺ノ多少アルヲハ止ムヲ得ズトシテモ
茲ニ大覚醒セネバナラヌ事ハ仰セノ如ク百年戦覚悟ニテ彼
等動物的性格ニ見レバ大蛇ノ如ク執拗ナル英グリヲノ如キ
米ニ対シテハ桃太郎デハ勤マラス必ズヤ智恵モ鋭ク力モ伴
フ大人格デナクテハナラズ箇様ニ見テ来ルト箱入息子や娘
ハ根本ヨリ出直ス程ノ必要アリ 肉体ニ水ヲ冠ル襖位デハ
ナク心ノ底ヨリ沁ミ付イタ垢ヲ洗ヒ真ノ出直シ立直シノ必
要アルヲト存候

此洗練ノツラサハ共業所感トシテハ地球上ノ老幼男女ノ全体ニマデ及ボシ候事ハ氣ノ毒ノ次第二候

カクテ後ニ來ルモンハ衣食住何レモ乏シキ貧シキ時代ノ必至ニ候事ハ各自ノ果報トハ申シナガラ愚痴ノ所報ハ恐ルベキモノト存ジ候 カ、ル世相ヲ見ルニツケテモ古聖ノ生死甚恐ルベシト云ハレシトモ厭離穢土感ニ徹底セラレシトモ深キ自覺ノ現ハレト存候

降りカ、ル火ノ子ハ払ハネバナラヌトハ申ス迄モナク差掛リ百年戰ノ覺悟モ勿論必要ニ候ヘドモ一面ニハ鬼ヲ仏ニスル働ラキモ寸時モ怠ラヌ必務ト存候 昨日モ長ク繫争トナリ居リシ土地ニ絡マル紛争ヲ同僚ヤ判事ト共力シテ円満ニ調停解決セシメタル後今迄青筋立テ、イガミ合フタル双方ニ是レヨリ仲善キ隣組ヲ得タル仕合セヲ感謝シタラ善カラント申シタラ其レハ何処ニ感謝スレバ善イノカト云フノニ私ガ答ヘテソレハ遠クハ國ノ制度ノ御庇デモアルガ近クハ仲ニ入りシ我々デモアロウト笑ヒナガラニ申シタラ俄ニ改マツタ様ニ立チテ敬礼シテ有難ウト云ハレタトハ列席皆善ク融ケ合フタ面白イ場面デモアリマシタ 今マデ強情我慢ノ男モ俯シテ自分ノ現実ヤ周圍ヲ觀ズル時淋シサヲ感ゼヌモノモナキト被存候ヘバ誠ニ現下ノ如ク利那モ安キトナキ恐怖時代ニ無神經デナキ限り感ナキハアルマジク候 ソレガ表面ニ出デズシテ瘦セ我慢ノ強ガリノミ出テ來ルモ

曲リクネツタ惡世ノ形相ト存ゼラレ候

か、ル時真ニ肺腑ヲ衝ク大慈大悲ノ大御心ヨリ美クシキ声優シキ思ヒヤリ涙ヲ以テ諫ムル親心透徹セル智恵豊カナル經驗等ヨリノ懇口ニドシナモノニモ人間トシテノ一応ノ理解アルモノニ論シ得ル力アル人アリテ只其前ニヒレ伏シテ懺悔ノ涙止メ難シト云フ程ノ感応アラシメ度キモノト存候 カクテ各々ノ本罪ガ懺悔ノ涙ニ洗ハル、時アラバ世ハ利那ニシテ住ミ善キ淨土トモナルト存候 誠ニ待望セラル、ハカ、ル大人格ニ候 或ハソレハ仏格カ神格カモ知レズ候モ何レニモセヨカ、ル事ハ渴望堪ヘガタキ処ニ候

美ク善キ声善キ音楽ト云フモノハ古來人間ノ世ニハ真ニ至宝トシテ尊バレシモ故アルカナト被存候 ルーズヴェルトヤチヤーチルヤスターリンヒットラー乃至幾多驕慢ノ徒ヲシテソレラノ角ガ忽チニ折レアマツサヘ一懺悔ノ涙止メ難シト(コレハ山伏弁円ガ親鸞ノ前ニ害心忽チニ碎ケテ跪キシ一利那ノ風景ト存候)云フ様ノ場面ハ想像シテモ痛快ニ候 漢楚軍談ニ張良簫ヲ吹イテ楚兵ヲ散ズト云フ記事アリシ様ニ候 慈心アリ智恵アリ文筆アリ博識アリ言語アリ美声アリ等ノ人アラバ此際比較的中立ノ処ヨリ全人類ニ呼び掛ケ各自ニ親モアラン子モアラン兄弟姉妹妻モアラン何ノ所詮ニ血ヲ流シテ争フヤト論シ続ケル人アリテ各自ニ物ノ哀レ生ケルモノ、互ヒニ助け合フベキ道ヲ示シ得ル人欲シ

キ次第二候 貴台ノ如ク長キ教育ニ携ハリシ御方ニハ人物鑑識ノ充分ニ行届キノト存候 上来ノ様ノ資格全分ナラズトモ善ク備ヘタラン人ハ百万ノ将兵ニ優ル事万々ナルベシト信ジ候 イバラノ道ノ六ヶ敷キ世ニ一脈ノ清風ハカ、ルノ外ナキ様ニ候ヘバ特色アル人物ノ養成コソ教育家ニ許サレタル天職ト存候 今ハ申度キヲモ思フ様云ハレヌ時ナレバニヤ何カ御挨拶ノ手紙ヲ差上ル積リニテ拙筆ヲ取リテモ思ハヌ愚痴ガ出テ筆ガ外レ候 立秋トモ相成候ヘ共御地ハ是レヨリマダ〱暑キ御事ト存候 愈々御健勝ニ銃後ノ御働ヲキ被遊候様祈上候 勿々敬具

八月十日午前

宮沢政次郎

小倉豊文様

侍史

追伸

此手紙ヲ書イテ居ル内ニ声ノ事ヲ申シマシタガ世ニ声程微妙ナモノハナイト思ヒマス 真善美ト申シテモ他ノモノニハ多少ノ粉飾ニ紛レ易キヲアリテモ音声斗リハ紛ラストハ出来ヌソーデス 観相家ナドモ最後ノ深サハ声ニヨリテ判断スルト云フ事デアリマス 左レバコソ当代ノ名人ト云ハル、モノ、芸ニハ打タレヌモノモ霜夜ニ破レ三味線ヲ弾ク瞽女ノ声ニ涙誘ハレ殊ニ小児ノ无心ニ泣ク声ニハ六尺ノ男

性モ断腸ノ思ヒアルヲ其例トモ被存候 御参考ノ一端ニモト

〔備考〕 白一重封筒

〔消印〕 花巻ノ19・8・11ノ「」

〔用箋〕 6に同じ。三枚（計六面）

〔筆記具〕 墨・筆

8 昭和十九年八月二十四日・封書〔封〕

〔表〕 姫路市鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

御直被

〔裏〕 岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和拾九年八月廿四日

時局緊迫も上り坂の一途を〔辿〕「下にしんにゆう、を書く」
り候折柄御身辺も定めて御多忙被奉存上候

敵機も中国辺までも来る事ある様子なれば数十分の距離にある処ハ尚更不安之御事ニ候

此処ハ随分六ヶ敷段階ニ差掛り候事ニ候ヘバ国民全体が大禊の心持にて大死一番の決心さへ付けば案外非常時も気楽

に過ぐる事ニ存候 国内何れに潜入されても紛れ弾でも当
れバ其れ迄と決心すれバ案外ニ諦らめの善き処もある国民
性故そこハ米英などに追隨の出来ぬ特性を發揮出来る事と
存候 此際一応ハ決死の覚悟を極めて弱音を吹かぬが善き
国民と存候 彼等〔ペンで「敵」と傍記〕も又精神問題に
注意し日本人の誇りを奪はんと種々の策略を廻らし居る様
子正ニ彼等の精神力と我國伝來のそれと鏢せり合ひの処ま
で來たと云ふ事痛快至極之事ニ候 今こそ幕末に志士輩出
せし時の如く眞の愛国者も出て眞の国民の再組織(精神の)
せらるゝ時と存候 誠ニ誤つた七八十年の錆や垢をとる事
難儀之事ニ候

此間の敵機來に二十三才の少年兵之飛行軍曹が彼の二十九
型式機を屠りしハ痛快至極之事ニ候 誠ニ護国の神と讚美
して可なる処ニ候 物量を頼む彼等にハ正ニ冷水三斗の感
あるべく候 眇たる戦闘^マきが空の怪物を屠りしハ正ニ精神
力の極致と被存候 此闘魂の不屈なる限り神州ハ万全たる
べく手頃の戦闘機と艦砲射撃を許さぬ海軍力のある限り国
民ハ信頼して可なりと存候 只人間の我他彼此の党心こそ
困りものニ存候今の内閣ハ其点にも随分注意して居る様に
候 此序に下克上の如何に悪しき事なるやを自覺すれバ軍
人も官僚も又蘇活之道あるべき事と存候 口舌と形式斗り
ハ善い様でも尤も誠意の乏しきものハ官僚にあらぬかと思

はる点多く候 是ハ過去の英米輸入時代の法科出の役人に
支配せらるゝ今の政治に過渡期として止むを得ぬ事ながら
人にハ訓辭するの指導するのと云ひながら慚汗背を沾すと
云ふ事もなく洒々として麻ひ状態にある彼等こそ痛く猛省
せねばならぬ一類と存候 其点教育の御職にて実験せられ
たる貴台の御経験ハ尊くもあり御反省の深きハ感に堪へざ
る処に候

思ふに千古の鉄則ハ變りなき次第なれば生者ハ必滅盛者ハ
必衰物も心も遂に頼まれぬものとすれバ彼等の燃へ盛りも
時間の問題にて大抵彼等の選挙前が極盛期と被存候 其内
党派心や自由や我儘心の烈しき国民が自国自分の直接脅威
も受けぬ戦争にいつ迄窮屈を忍び犠牲を払ふやハ言はずと
知れた山の見へて居る事なれば此処国民忍苦辛抱一番の時
代と被存候

先ハ比較的敵襲〔ま〕〔き〕と誤記〕近き処に御見舞申上
度心得にて書き初めながら思はず長く相成候

未だ残暑も厳しく健康にも一層注意せねばならぬ折柄殊更
御用心等一々願上候

此地方御庇様にて水害に見舞はれし以外の処ハ米ハ平年位
に被存烟物ハ少し劣りし位に候
併し段々疎開の人達も入り來て窮屈となる事ハ一応覺悟せ
ねばならぬ処と存居候

外よりハ手も付けられぬ要害も内より破る栗のいかなと
いつた様の戯哥があつた様に聞いた様に候　いつでも外圧
によりてのミ破れたるものハ少なく内より破る弱者ハ大抵
生活より来り候事なれば国民の精神力が第一　次にハ善き
政治が待望せらるゝ処に候
まづハ是にて禿筆を擱き候　　匆々敬具

八月二十四日

宮沢政次郎

小倉豊文様

尊下

早くニ仏心鬼手ト云フ語ガ善ク使ハレタ時^マ有之候　今コソ
此語ノアル点マデ用ヘラレテ善キ時ニアザルカト存候

〔備考〕白一重封筒

〔消印〕花〔 〕／〔 〕 9・〔 〕・24／〔 〕

〔用箋〕6に同じ。三枚（計六面）

〔筆記具〕墨・筆

9 昭和十九年九月四日・封書〔封〕

〔表〕姫路市鷹匠町甲三四

小倉豊文様

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和十九年九月四日

度々の御懇書難有拝誦仕候

今の鬱陶敷地球上の気分ハ老若男女賢不肖色と程度こそ少
しハ違ハ悩みなきハ人にあらずとても申すべき時遠近ハ問
はず心の窓よりさし込む光りにも似たる音信を頂き又ハ言
行に接する事ハ誠生^マき甲斐ある人間の清福と存候　恵心僧
都がまづ三惡道を離れて人間に生れ出づる事大なる喜びな
りと仰せられたるも至言と存候　人間ならでハ知られぬ苦
悩もある代り又人間ならでハ味ひ得られぬ清福もある事と
存候

かゝる世に生きて尤も強く感ぜらるゝものハ御書信にある
如く我等の無力感に候（善き意味の）左れど誤れる有力感
の嬌慢によりて幾億の人類を苦しめ無量劫償ひ難き罪を造
るよりハ増しとも存候　現在の世相如何なるが幸か不幸か
測り別る事も出来ず　まして幽界の事ハ冥々として尚測り
別る事能はず案外にも玉碎と云はるゝ人々など尤も恵まれ
たる人あるやも知れず候　元禄の昔四十七士の命乞ひせざ
りし東叡山の座主ハ尤も思慮ある人とせられ候も旨ある事
と存候　目先の利害を以て測り別る能ハぬ処に順逆の運命
も動くものと存候

昨日当地（岩田徳弥氏裏にある寺）光徳寺に参り事の序に貴台が苦学して小中大の学校教員を歴任しての御所感今の世に正信を獲たる人なき事誤れる教育しても慚愧も知らぬ様成り行きし御所感等話し候処此人も龍谷大学出の四十以上の僧侶にて自分の現状や世相に不満と慚愧を感じ居る人に候故大に共鳴書信を上げる時の為め紹介して呉れと云ふにより名刺を申受け同封申上候間御含置之程願上候 同時に又日本人が酔ひどれ斗りも居らず毒気の少なきものより醒め初めて次第に本来の姿に復帰するものも多くなる事に候 それハ機縁さへ熟すれば必しも時間や手数を多く要するものとも限り申間敷候 太子の仰せられし日域大乘相應地と存外感応早きやも知れ不申候 根機強ク御自重被下度候

御子息三人の外又御出生あるべき由お芽出度御事二候 心身健かに御成育の事奉祈上候

当地方一昨日の二百十日稀なる好日にて農作物も水害地之外ハ誠ニ恵まれ稲作も平年又ハ少し以上となるかも知れ不申候 配給のふへる様の事ハなく候共心豊かにてある事ハ地方民の幸に候 御地の事国全体の事となれば何としても乏しきを忍ぶ外なき状態にハ候へ共昨夜放送にて承はりし緒戦に独逸に襲はれたるソ聯のレングラードやモスコーの状態などとハ比べにもならぬ難有さを感じずるものに候

此頃痛切に感じ候事ハ運命の不可思議と云ふ事に候 太子様程の宿命（観）通に達せられし聖者にても御自身の事ハ如何ともせん様なく御子孫の断絶せらるゝ事を思はれてハ誠ニ断腸の思ひあられし御事と察せらるゝ事二候 此頃広き視野に展開せらるゝ世相人事近く身辺に見らるゝ諸般の事皆この運命の不可思議を思はせらるゝものにあらぬハ無く存候 近くのミを見れば眩惑昏倒せんとする世相人事も静かに時間を通じ又其帰趣の冷厳なるに想到する時天網恢々の語も凜として生き更に老生が若年の時ある寺にて見たる西有穆山^ガ禪師の書かれし小幅の文字（宝積経の偈とありました）

仮令経百劫 所作業不滅 因縁会遇時 華報却自受

以上の様であつたと思ひます 此の文字や遺教経の忍の徳たる持戒苦行も又及はざる処なりとの御論しが如何に過去に救ひを受けかハ測り知られぬものがありました まことに数行の文字が生きて力となり又生命をもト救はるゝ事あるハ先哲の血涙の結晶なればこそと感謝せらるゝ次第であります 半偈の爲めに身を捧げた雪山童子ならずとも心あると無きとを問はず此の大乗相應地の御恩を受けて居る国民なればこそ平素ハ大（？）九（？）兵（？）ともなり盗跖の外考へなきものも愈々の時本統の面目を発揮する事ハ有り難き事に候 左りながら平素のだらしなさハ何たる事

ぞや 番人なれば巴野山の物ハとり放題百分中九十余ハ現
行の盜犯を爲す国民なりとハ情けなき国民性にも候 善く
教ふれば是に従ふと此民を信せられし太子の恩袖に涙の乾
く時なかるべく候 日蓮上人の涙ひまなしも信の上のミに
もあらずして今見る如くなる愚昧の人間に流されしものと
も思はれ候

地獄の縮図とも見らるゝ戦争絵巻も箇々の所応や皆各自因
縁の所作なると思へ候 身毛戰慄せらるゝを覺へ候

殊に貴台の視野に近く展開せる、上方地方富と物の外何も
のも考なき大阪地方等の人も富の獲得に依りて盤石の基礎
に立ちしと思ふも束の間天人五衰の日よりも果敢なく富の
税に子弟ハ兵にと是迄他の犠牲にて肥へたるものも清算の
時ハ身にも附かず悔恨の涙も追ひ付かぬものゝ多々あるべ
くト存候 此地方も今日より三日間四十五歳迄の壮年の
人々皆兵籍を附せられ暑き処にて訓練せられ居り候

共業所感とハ申せ首陀も利利も同様の苦惱何とも気の毒の
事ながら此時節二あるものゝ、因縁の所応ト申す外なかるべ
く候 これハ国土防衛の上でハ惣蹶起であり心身の内觀よ
りハ惣懺悔でなくてはならぬ事と存候

只此意味でハ我国など本来なごやかなる情味勝の国民に候
故惡と申しても浅く懺悔にも比較的入り易くも被存候 日
蓮上人の仰せられし惡に滅びずして愚に滅ぶると仰せられ

も此辺の意味かとも存候 然るにユダヤハ是と大に違ふも
のあり 彼等の先代ハ激しき民族闘争と生活難と國を亡ぼ
されたる怨恨と執拗とも云べき根氣強さと更に理性と背景
とせる哲学まで製造して自分の爲す事を正理なり人道なり
と裏付を爲し頑然譲らざる不敵の魂を養成したるものと存
せらるるものに候 ルーズベルトなどの面魂マタハ正に其標本

の様被存候 是を退治する事ハ親心の涙斗りマタでハ行かず必
ずや彼等の主張を木マタつ葉微塵にする丈の理論も無くてハな
らずそれを推進せしむる科学等の力も必要とする事と存候
殊に今の状態を押し進めて考へる時過去にありし平和時

代など想像も出來ず更に層一層残酷なる兵器の出現により
て破壊の度ハ更に甚敷遂にハ人間一度び立ちて争へバ双方
共倒れの外なきまでの自覚二達し互に全滅するよりハ寧ろ
仲善くしようと云ふ処までにならねバ平和と云ふ事ハない
様の状態に立ち至るにあらずやと思はるゝ程の様相に被存
候 人壽十才にまで縮まると云ふ仏陀の予言も著々近く相
成るものと思はるゝ、滅劫時代の哀れさとも見られ候 十才
台の少年が段々戦場に出て来る様になり年頃となりても美
服一つ纏ひ得ぬ少女を見る時氣の毒さに暗然たるものは老
人斗りにもあらぬかと存候

前途まで想像して余り悲觀に偏した事を考へる様でありま
すが仏語ハ外れぬが常則の事とて明治頃の時代にハ遠くに

眺めて居る事柄や三界無安とか五濁惡世とか云ふ事が寸毫の違ひもなく加速度に迫り来る状態ハ遺憾ながら昔の通りになるものと思ふ外ありません

曠野にて猛虎に追はれし旅人が空井に避難しながら藤蔓に取付きその根元を月日の鼠に噛まれながら僅かに葡萄の液に咽喉を湿ほし居る譬諭ハ其儘私共の日暮らしの有様である事ハ只其儘と肯定する外ありません 只加速度に仏様の予言よりも尚早くそれが来る様に思はれるのハ人間の科学と云ふものを悪利用する力が進ミそれが自滅を早めて居るものと思はれます 歐洲都市の破壊（でハなく）今度ハ破滅であるか知れませんが 若三世悠久に生きて四弘誓願にても保たぬならバ何の爲めに生きて居るかあるに甲斐なき儚なき存在と思はれ候 かゝる分り切つた事まで書いて自誠せねばならぬ世相の如何に気分の上に迫り居るものなるかハ自認し居る処に候

かゝる危き世相こそ誠ニ三毒の恐るべきを知り正信の確立せねばならぬ事を身の生死を超へて体得すべく絶対之好機とも被存候

以上纏らぬながら愚筆を陳ね候 勿々敬具

九月四日

宮沢政次郎

拝

小倉豊文様

侍史

尚午末筆御家内様外皆様愈々御健勝念上候

〔備考〕 白一重封筒

〔消印〕 花巻／19・9・4／岩手県

〔用箋〕 6に同じ。五枚。ただし、五枚目は十三行あたりで切られており、裏面には書かれていない（全九面）。

〔筆記具〕 墨・筆

*表宛名左に赤鉛筆で、「原稿紙」と書き線で囲んでいる（小倉の筆、何かのメモ）。

10 昭和十九年九月二十六日・封書〔封〕

〔表〕 姫路市鷹匠小路甲三四

小倉豊文様

〔裏〕 岩手県花巻町

宮沢政次郎（朱印、電話二〇八番・振替仙台

九一五六番）

昭和拾九年九月廿六日

十七日御発御懇書拝承仕候 当地ハ秋も次第二深く相成候

処御地方ハ暑サ未ダ去リ申サヌ事ト存候

過日來心斗リノ送リ上候モノニ御子様達御揃ノ御礼狀心暢
ビヤカニは意見仕候 何方モ子供ノ世界ハ善キコトニ候 何
時マデモ子供デアレバ善キニソウアラレヌ処ニ五濁世ノ險
シサルガ悲シムベキ事ニ候 生長ト共ニ修羅道ノ住人ト
ナラネバナラヌ青年達モ可愛ソウデアリ頼リ度キモノニ頼
ラレヌ女子モ又氣ノ毒ニ候

此頃地藏本願經ヤ延命地藏經ト云フヲ讀ム因縁ヲ与ヘラレ
候 六道能化ノ地藏菩薩トハ其假觀世音菩薩デアリ又虚空
藏菩薩トモ拜セラレ候 何レモ縁ニヨリテ化度セラル、モ
ノト存候 カ、ル慘キ世相モ止ムヲ得ヌ因縁ニヨリテ來リ
必然ノ果報トシテ苦痛モ艱難モアルコトナガラ此間ニ大ナル
大聖攝化ノ御働ラキモアルコト深ク信ゼラル、処ニ候 凡
夫妄リニ情ニヨリテ妄断ヲ下スベキニハアラズ種々ノ御苦
勞アラセラル、大聖ノ攝化ニハ只謙遜ニソレヲ甘受スベキ
モノカト存候 物量ヲ頼ミテ強引ニ寄セ來ル敵モ鬱陶敷事
ナガラ是レモ箇心ノ影ニテ報ヒハ更ニ免レ得サルモノトス
レバ之レ又甘受ノ外ナク鬱陶敷事ナガラ止ムヲ得ヌ事ニ候
箇々ノ果報ニヨリテハ痛マシキ散華ノ若者モ見ラル、次
第ナガラ是レ又因果理法ノ外ナラヌト覺ヘバ犠牲ニハ感謝
シナガラ只管懺悔ノ外ナキモノト存候

御身辺モ定メテ鬱陶敷事ノ見聞セラル、コトナラン 又国内

ニモ我儘ナルモノノ僞慢ナルモノノ米英思想ノ名残殊更高山ニ
初メテ日光照リテ次第第二低キニ及ブ如ク今ヲ盛リノ下剋上
風景ハ農村生産物ノ価格ヤ職人其他ノ賃金等総テハ我儼ノ
限リト見受ケラレ候 ソノ様ナ清算モ又早晚來ル時ト存候
総テハ懺悔ニヨリ又自覺ニヨリ転重輕受モ考ヘラル、事
ニ候 只頑然タルモノコソ困リモノト存候 ソレハ僞慢ノ
モノニ候事ト存候 物ヲ頼ムモ権力ノ背景ヲ頼ムモ皆ソノ
範圍ニ入ル事ト存候

仰ノ如ク物ノ不足モ左ルコトナガラ一部ノ我儼者コソ世を濁
ス厄介者ニ被存候 コソ制裁モ国法ノミニテハ行カズ 結
局ハ教ノ善キモノニ依ル外ナク何レモ太子ノ御精神ニヨリ
テ清メラル、外ナキ事ト被存候

此手紙ハ中休ミシテ書イテ差上候 一昨日來天候モ善ク相
成リ稲刈リハ盛リニ入り掛ケ居リ候 平年位ニハ參ル予想
ノ由ナガラ東北ノ穀倉ナド、オダテ、供出ヲ強ヘラル、模
様ナレバ配給ハ却テ窮屈ニナルカトモ思ハレ候 只朝令暮
改ト親切モナク信用モナク背景ヲ頼ミテ強要スル官僚輩ハ
尤も困リモノニ被存候 何レモ清算期ニハ応分ニ苦痛ハ免
レヌ事ト存候

先ハ御返事旁々近狀ザツト申上候 勿々不尽

九月二十六日

宮沢正次郎

小倉豊文様

拝

侍史

〔備考〕 白一重封筒

〔消印〕 花巻／19・9・26／岩手県

〔用箋〕 黄緑野12行（四方子持ち野）、薄茶（薄桃） 中質紙
便箋四枚

〔筆記具〕 墨・筆

11 昭和十九年十一月十一日・封書〔封〕

〔表〕 兵庫県姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

〔裏〕 岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和拾九年十一月十一日

日増寒冷ニ相成申候処皆々様益々御壮健ニ御過シモ為在候
御事ト奉慶賀候

非常時様相ハ日々辛酷ヲ加ヘ候ヘ共御庇様ニテ私共モ各別
ノ事モナク過サセテ頂キ居候

国難危急ノ際トナレバ若キ人々ニヨリテ神風ヲ吹キ起シ呉
レ候事自国ノ有難サト共ニ謝シテモ謝シ切れヌ感激ニ候

銃後モ是レニヨリテ真面目ニナリテ心ヲ改メ身勝手ノ振舞
ヒナキ様ニ慎ミ度キモノト存候 事実ハマダ／＼至ラヌモ
ノアリ下剋上ノ風甚ダシキハ嘆息ノ次第二候 抜ケ切れヌ
人間我執ノ病ニ候 為政者モ各箇人モ唯物思想ニヨリテ毒
セラレタル垢ヲ去リ道義性ニヨル政治経綸ノ建立ニ努力セ
ネバナラヌト存候 仲々深キ心垢ハ取レズ下級ノ唯物思
想ハ今盛リニ見受ケラレ候 職人達ナドノ道義性ヲ失ヒタ
ル又ハ純朴ナル〔？〕ノ農村人が耻知ラズノ我利思想ニナ
リシ等初メニ上級ニアリシモノガ今下層ニ達セシモノ、如
ク瀾漫スル此ノ如キニ至リ抜キ難キモノトナリシハ遺憾
ノ事ニ候 何時モ乱レタル跡ハカ、ルモノナランモ嘆ズベ
キ風潮ト存候 為政者教育者指導者何トシテモ骨ノ折レル
時節ニ候 御書面ニ依レバ近頃ハ勤勞奉仕ニ御苦勞トノ御
事何レノ学校ニモ同様ナガラ生徒達ニ対シテモ氣ノ毒ノ次
第二候 私共ノ処ニテモセメテ生徒ノ衛生斗リモ善クアラ
セ度キモノト念居候

ルーズベルトノ四選ハ彼等モ随分傾キタルモノニ候 傾ケ
バ必ズ覆ヘル運命ヲ免レズ彼等ノ傲慢尚悟ル処ナキハ正シ
ク天譴ノフカキヲ思ハシムルモノアリト存ジ候 対手タル
我国ノ苦勞モ死活ノ危機ニ臨ムモノモアルナルベキモコ

レ又天ノ配劑毒ノ深キ愚ノ深キニ比例スルモノトスレバ又止ムヲ得ヌ自然ノ数ニ候カ 氣ノ毒ノ事ナガラ今後育チ行ク若キ人達ハ患難ノ中ニ生ヒ立チ行カネバナラヌ運命ト存候 カクテ又國家ノ若返リトモナルベキカ 只時々ノ最善ヲ尽スノ外ナシト存候

近頃三浦參玄洞氏ニ御逢ヒモ為在候由 御健勝念居候

何方モ物不足ハ致方ナク候ヘ共心ハ豊カニアリ度キモノト存候 人ノ一面ハ何トシテモ物ヨリ関心離レヌ習ヒトテ過ギタルハ及バヌ如ク近頃ハ却テ食生活等ニノミ心囚ハレ凝リテハ思案ニ及バヌ嫌ヒモアルカト存候 超然タル立場ノ保持モ養生ノ一助ナラント存候

何卒御心身御健カニ寒サニ負ケヌ様御過シ被為在候様奉祈上候 勿々敬具

十一月十一日午前

宮沢政次郎

小倉豊文様

只今

仙台ヨリ電話ヲ貰ヒ九州地方又空襲アリシ由御地方ハ工場地帯ニハ遠キ事ト存候ヘ共阪神ニハ近ク油断ハ出来ヌ事ト存候 如何ナルヲモ運命トハ存候ヘ共出来ル丈ハ為シテノ上ノヲ 運命ト存候間何卒出来ル丈ノ御予防ハ為サレ度キ

御事ニ候 物ノ不足モ毎日聞カサレ居候ヘ共其人々ハ割合ニ研究活用ノ氣分乏シキ様ニ候 与ヘラレタルモノヲ活用スレバ随分ト役立ツモノト存候 近頃配給ノ甘薯ナドモ手入レノ仕方ニテ榮養価上ル様ニ候

ソレハ御承知ノ御事ナランガ洗フテザツト蒸シ薄切りニシテ（出来ル処ニテハ）天日ニ乾カシ食スル時炙リテ食スレバ齒掛リトネバリモ出来殊ニ嚙ムヲニヨリテ唾液ト交レバ葡萄糖變化モ考ヘラレ乾燥ヤ炙ルヲニヨリテ陰性ハ陽性ニナルトモ見ラレ何レ蒸シタルマ、ニ食スルトハ別ノ食物トナル様ニ候 何レ動植物ト云フモ大自然中地水火風ノ配合ニ外ナラズ候ヘバ人間サヘ素直ナレバ今后ニ残サレタル問題トシテ人間ガ大自然ニ恵マル、処多々アルベシト存候 不自然カ反自然ニテアラヌ限り人間ハマダ／＼恵マレテ余リアル様ニ存候 若シ今后ニアノ洪水ヤ大饑饉ヤ激シキ疫病等ガアレバソレハ人間ニ与ヘラレタル殃罰ニ外ナラズト存候

〔備考〕

《消印》花〔？〕／19・11・11／〔？？〕

《用箋》

《筆記具》封筒宛名・差出人署名、墨・筆

本文・ペン

12 昭和十九年十二月十五日・封書〔嚴緘〕

〔表〕兵庫縣姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎〔青ゴム印、電話二〇八番・振替

仙台九一五六番〕

匆忙之中ニ暮も近く相成申候

御障りもなく御過し被遊候哉

卒爾之事ながら故賢治の遺せし物のうち少分ながら贈上候

間浄業の一端にも御使用被下候へバ幸甚至極と奉存候

若き学徒達や純真なる人々のために救はれ行く国状ハ難有

極みに存候 夫れに付けても応分の感謝ハ捧げ度きものと

存候

窮屈の中にも春待たるゝ心ハ何となく賑やかに被存候 何

とかして明朗の年を迎へ度きものと存候

愈々御自重御健勝念上候

勿々敬具

十二月十五日

宮沢政次郎

小倉豊文様

尊下

尚故人の（攝折云々の遺文）出版等に関するものに就てハ
一切御配慮下さらぬ様添て申上候

「塔の詩」コロタイプ少々製作中ですから出来ましたらお
目にかけます。

清六

〔備考〕白一重封筒、書留

〈消印〉「？」19・12・15「？」、書留（青印、朱印）、花巻

○参〇八（青スタンプ）

〈用箋〉6と同じ。一枚（表裏二面）

〈筆記具〉封筒裏日付、ブルーブラックインク、ペン。そ

れ以外は墨・筆

*二仲は清六筆（墨・筆）。同封ハトロシ封筒（筋入り）、
表書きとして上部に、筆で「上」と記入がある。

13 昭和二十年一月十五日・封書〔封〕

〔表〕 兵庫県姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

〔裏〕 岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和貳拾年一月十五日〔なお、この前に日付のゴム印「昭和廿年〔菴〕月廿〔ママ〕五日〕と見えるものあり〕

久しく御無沙汰申上候 過般ハ御心尽しの御書簡難有拝承致候

世相日々凄敷形相を呈し候折柄格別之御障りもなく御健康に御過しの由喜上候

昨夜ハ伊勢外宮に落弾ありし由ニユースにて承り候 国民の誇りを傷つけらるゝ事甚大ながら是又予〔？〕貴台の被仰候如く誠の国民性と誠の人道をも失ひたるものに対する誠の神の警醒と思ふ外なき次第と存候

思へバ嘉永以来彼等と交際してより文明の仮面を被れる物質の便利に酔ひ長夜の夢未だ醒めやらず昏々狂態を演じ居る有様と存候 物量にハある程度物量にて対抗せねばならぬ事ながら本来の魂まで喪失せんとするハ遺憾限りなき事二候

彼等と交際せし跡を顧みるに

原始の素朴清明を代表する神道精神を失ひ

支那より輸入以来漸く我国に移植して此国のものとせし

仁義礼智信孝悌等の人道を一擲し

印度渡来このかた此国によりて大成せられし仏教精神又失はれんとする時

かゝる国難の起り来りし事偶然にハあらずと存候 今漸く清算期となりてかゝる深刻なる世相を質し来る事天譴の神意か容易に知るべきにハあらぬ事ながら 覚醒と懺悔と正道行の外蘇活の道ハなきものと存候 是より何ものも清算期の形相を示す事と存候 只懺悔により迷路を離れ正道に帰して僅かに免かれ得るものと存候

ユダヤによりてかゝる世相を呈する事毒を以て毒を制すると云ふ配剤か 顧みれば七十年の夢ハ実に昏々たるものに被存候 無礼不作法か磊落の様に見へたり非人道の悪魔精神が法律と云ふものに保護せられたり心を乱すものが芸術と云はれたり生命を蝕むものが衛生と云ふものでありたり 仁術と云はれる医術が尤も残忍な金儲けの道具になり義を代表すべき弁護士や代言人と云ふものが尤も悪質の飯食ひ種となりたり数へ上げれば上から下まで笑止千万の事斗り誠の、千中無一ハ愚か万中一二とも云ふ様になれバノアの洪水も地球の爆発も仮令ありても怪しむべき事でハない様

に思はれ候 御話申度ハ山々ながら覚めた人には絮言ハ無
用只せて覚めかゝりたる人を揺り起す程の心掛ハあり度
きものと存候

国内も戦場と云ハる、今日何方も落付のなき御事ながら
愈々御健勝ニ御過しの程偏ニ念上げ候

匆匆敬具

宮沢政次郎

小倉豊文様

侍史

過日来御返信申度存じながら筆硯氷り手も思ふ様動かず今
日漸く陽光を仮りて禿筆を以て申上候
外ハそれでも吹雪激しく寒氣ハ朝ハ零下二十度位まである
様に候

愈々御大切に祈上候

〔備考〕

〔消印〕〔不明〕

〔用箋〕黄緑野（四方子持ち野）十二行便箋六枚

〔筆記具〕墨・筆

14 昭和二十年二月二十八日・封書〔~~ア~~〕

〔表〕兵庫姫路市

鷹匠町甲三四

小倉豊文様

書留

〔裏〕二月廿八日

岩手県花巻町豊沢町

宮沢政次郎

清六

★

寒さ尚去りやらず 非常時益々深酷に候

御互自重ノ外ナキコトニ候 民族ノ決戦同時ニ物心ノ決戦思
想ノ決戦ト存候 弱音ヲ先キニ吐クモノ、負ケル戦ニ候
物ノ少ナキモ左ルコトナガラ私共ノ地方ハ天明寅年ト天保申
年饑饉ノ経験アリ 此ノ紀錄ヲ生カシテ此思想困惑ノ非常
時ニ役ニ立テタキモノト存候 東北モ穀倉ナド、煽動サレ
テハ却テ迷惑ノ事ナラント存候 疎開者ノ多クナルニ連レ
窮屈ハ一層加ハルナラント存候 少ナキニ堪ヘテ最後マデ
生キ抜クモノ、ミガ今後ノ日本人ナルベシト存候 重テ御
自愛ト御自重ヲ切望仕候

御書面ニ依レバ御病人モアリ幼嬢様モ御死去ノ由因縁致シ

方ナキナガラ御痛ハシキ事ニ候

左リナガラ又三世ノ重障ヲ和ラゲ向上（現状ノ如キ世想ヲ

超ヘテ）ノ一路ニ向フ止ムヲ得ヌ道程カトモ存候

尚別便ニテ余分ノナキ今日此頃ニ付少許ノ物資清六ヨリ御

届ケ申上ル由又同封ニテ心許リノ御見舞ノ印贈上候

乍末筆御家内様愈々御清健祈上候

先ハ右申上度迄

匆々

二月二十八日

宮澤政次郎

小倉豊文様

尊下

☆

おてがみ拝見いたし、何とお痛み申上る言葉もありませ
ん。どうかお悲嘆のあまり疲れませぬやう御家内様方特に
御注意下さい。

此の世を天にする仕事は、益々遙かの向ふのやうではあり
ますが、私共は少しも急がず、あわてず、毎日毎日、一歩
一歩と進みませう。その中何か元気のいゝもののお目にか
け度く存じ居ります。

客車便で些少のものの仏前にお供へいたします。

二月二十八日

宮沢清六

小倉豊文様

〔備考〕和紙封筒

〔消印〕花巻／20・〔2〕・28／〔 〕

〔用箋〕政次郎部分（★以下）は赤茶野十二行便箋二枚。

清六部分（☆以下）は無地中質紙一枚。

〔筆記具〕本文、政次郎部分（★以下）は鉛筆。清六部分（☆
以下）はブルーブラックインク、ペン。

*宛名および差出人住所氏名は、ブルーブラックインク、
ペン、清六筆。なお、表書き「書留」は赤鉛筆書き、同じ
く四角で囲んである。表に書留受け付け番号スタンプ印あ
り。裏日付の上に鉛筆で「20年」と書き入れあり（小倉筆か）。

15 昭和二十年三月九日・封書〔厳緘〕

〔表〕兵庫県姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎〔青ゴム印、電話二〇八番・振替

仙台九一五六番〕

昭和貳拾年三月九日

昨八日着の御懇書拝誦致候 御令嬢の死と云ひ又奥様の御病氣と云ひ殊に往来も不自由なる時節柄艱難も左こそと察上候

左りながら此時節となりてはいづこも同じ共業所感の悩みなきハ先づ現代人にハなき事と存せられ其中二別業の所感ハ又箇々に働いて何れハ免れ難き事ながら同じくハ明らかに因果を信ずる人にハ悩みも軽く受けられ候事と存候 仮令経百劫所作業不減と聞かされ候ヘバ何れハ今生にて懺悔の思いひ切なる程業報輕受の御恵みもある事ならんと存候 いよゝ御国の事情も緊迫の一途ながら御当面之如くまだゝ〳〵徹せぬ人々多き事なれば一様に痛切に時艱を感じ本来の気分を取り戻し候ハゞそこより窮通の道開け蘇生の道も生じ来るものと存せられ候 総てハ因果の所報と確信候ヘバ今後の道も自ら定まり痛切なる懺悔と共に今後の悪業を造らぬ用意と相成る事と存候

此頃の米英鬼畜等之言を聞くハ尤も厭はしき事二候 行動の上より斗り云ヘバ左もある事ながら十界互具の立前よりハ他の事ばかり彼是れ云はれた次第でハなく古く別れし兄弟が境遇に支配せられて残忍性ともなりし事憎むよりハ哀れと感ずるが心あるものゝ感ずる処とも存候 何れハ人類

に子供のなきハあらじ その白糸の様な子供にまで惨忍性を發揮するとすれば寧ろ悪質なる病者と云ふ外なく憎む事が大人気なき事の様に候 子供と云ヘバ何れも可愛く思はれ生先善く健かに善く強くあらせ度く思ふ事ハ一般に常識ある親の心掛ながら(愚かなる例外山の如きハ嘆かはし)殊に善くする積りにて悪くするものゝ、例ハ更に多々なる事又嘆はしき事なり それに就き已に御心付の事ながら今の様に物乏しき時代に誤れる過去の(殊に独逸又ハユダヤにカブレテ)栄養感に囚はれ夫れの思ふ様ならぬ為め気の餓ゆる事ハ尤も愚かしく損害多き事と存候 夫れ矯正せられたる一二の例を参考ニ申上候

私の身辺に此頃に生れし子供あり 過去の物多き時節より総て勝れたる出来生へにて誠に喜敷存候 原因ハ他なし魚肉卵等の乏しき時とて殊に主食が一分搗きの玄米に近きものとなりし事最大原因と被存候

是に暗示と明示を得て今私ハ粉糠研究を進め度存居候 近在の人々が馬糧にて米を精臼する為め出る粉糠を譲り受け粉おろしにて篩ひそれに繋ぎの為め少量の(二割位か)小麦粉を入れ水に練りて延ばし少量の野菜刻みとを入れて延ばし油を引いて焼けば善きお八ツの様になり(醬油少しにて味をつけ)大人の食料としても結構に出来上り候 御参考迄に

下地ハまだ雪深く彼岸も近き事ながら春ハまだく遠く感ぜられ候

空襲下随分鬱陶敷御事ながら何れも同じ共業所感の下信念強く此時局を通過致し度く存候

此地方も決して桃源境にハあらず北ハ八戸南ハ石の巻何れも上陸可能の心構にて「？」兵疎開おさくゝ怠りなく候

先ハ不取敢近状旁々御見舞まで 勿々敬具

〔備考〕和紙封筒

〔消印〕「？」20・3・9 「岩手」 「？」

〔用箋〕赤茶三方子持ち野十四行事務用箋二枚（表裏四面）

〔筆記具〕墨・筆

16 昭和二十年三月二十一日・封書〔~~ア~~〕

〔表〕兵庫県姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

御直披

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和貳拾年参月廿一日

〔以下政次郎（★以下部分）、清六（☆以下部分）の書簡だが、先に前便として送られた小倉の書簡がカーボンコピー（四百次詰原稿用紙五枚。冒頭宛名および日付のみ墨書で残されているので、先だって△として掲出しておく）

△

宮沢老台

侍史 廿年三月十六日

拝啓、御芳書三拝九読。同感共鳴に不堪。如実に「明日ありと思ふ心のあだ桜」なる今日なれば、又々筆執り申候。失礼なる申分なれど、愚生の如き変屈学者の考へ候事は、大正時代の外道教育を受けたる（特に高等学校・大学）所謂知識階級の四十・五十の都会居住の人間には全く受入れられず、（多少の例外は勿論あれど）、所謂学歴なき（高等教育を意味す）地方の篤信篤学の六十・七十の老台の方々に却つて道交共鳴を得る次第。而も尊台の如き維摩の御化身とも、仰ぎ奉られ、近くば日夜道交をあたゝめたき思ひ切なるもの有之、度々筆とる次第、不悪御了承願上候。且又通信が便りなくなりし昨今、後日の為にもと存じ、今後は如斯、復写紙にとりて申上ることに相定め申候。この点も不悪御了承願上候。御眼よろしからざる由承り候につき、

大字にて認め度にも、紙不足の世、細字の乱筆御ゆるし願上候。これもさ、やかなる報恩の一徳とや申すべき。年令は若くとも、地方に住み、高等教育を受けぬ人は正しき物わかりよろしきが一般、面白きものにて候。今月十日、山下將軍の陣中談に「從來の教育がよかつたならば、この戦争もこんなに長びかぬ……」とありしはまことに同感、かなしき同感にて候。將軍は家庭教育と申され候も、学校教育は更に悪かりしと愚存仕居候。御状の如く子供に対する真実の愛情なくなりしは家も学校も同じ一般と存候。所詮、極楽の因縁純熟は地獄の底をついて浮上つた者ならねば不可解なれば、小生は内地戦場化の戦局切迫は少しも心配せず、むしろ早きを歓迎する位、(軍備の都合は別として)たゞ

至尊の宸襟を悩し奉るは恐多き事ながら、これも国民の蒔いた因果の種の成熟期、しばらく御辛棒願はねばならず、そこで戦の方は軍人さんに委せ、その後に来るものへの用意が小生の如き人間の天命と存じ、従来、数回の懇請を固辞し居たるも、今度は思ひ切つて三顧の礼に酬ひ、賢治さんの「これからの本当の勉強……」をなるべく広く因縁を結ぶ方便ともなる事と存じ、母校大学の講座に戻る決意仕候。公表は四五月頃となるべきか。本日決意し内定いたしましたま、不取敢御報申上候。実は賢治さんの如き生活に入らんと種々方策をたて候も、その天分とその因縁となき小生

には、鵜の真似する鳥にしかなれず、それよりは学問・教育の頂上に座して、少しでも賢治さんの真精神を広く伝へるが本当の分別と結着いたし候次第。法華經の「長者窮子」のたとへの如く、今までの小生はヒネクレたる、わがま、の迷ひに彷徨せるものとしみじみ感じ申候。お笑ひ下され度候。「大学教授」の名にとらはれし所業ならぬ事は、貴台には御了承願へること、存じ候。「博士とり」の勉強は間違つてもいたさず候間この点御安神願上候。呵々。豚児の死と愚妻の病につきて御懇切なる御言葉、難有奉謝候。御蔭様にて多少は因果の理を知らしめられたる為に候べし、逆縁却つて聖胎長養の機と信じ居候。「極楽に先に行つてろこりや娘、お前死んだを無駄にやせぬぞよ」と粗末な手製引導をわたし候。呵々。しかし、健康な子を負つて実家の母の葬に行き、自ら病みて子の看病出来ず、それを骨にして自ら病軀を却つて負はれて帰宅せる愚妻は、中々心の妄執去り難きらしく、無理なしとは察し候へども、やはり「女子と小人……」の感なくんばあらず、六千人の弟子が出来た八ヶ年の間、自分の妻の教育はできなかったというマホメットのことも思はれ候次第にて候。しかし、教授先生の余暇の家政婦(夫?)看護婦(夫?)兼業一ヶ月半、どうやら馴れて一人前になりしよと得意になつたが凡夫のあやまり、三児にシラミをわかせてしまつたのには困入候。

呵々。愚妻にきけば下着はみな三日にあげず洗濯してゐたとの事。さればシラミの発生も因果必然、シラミをうらむ道理もなく、自分の女房はさてをき、縁の下の方持たる日本の女人のエラサを反省せしめられ候。さるアメリカ人「西洋の家に住み、支那料理を食ひ、日本婦人を妻とする」は人生至上の幸と申せしとか、家はどうかと思へど、他の二つは現世主義のアメリカ人ならずとも真かと存じ候、呵々。「鬼畜米英」についての御感想、共感至極、小生も兼々痛感いたし居候次第にて候。パネー号事件にて日本中の小学校の児童をさがせて、人形を送るだ、子供使節をやるだやらぬだとアメリカのきげんとりをさせたのは何年前に候ぞや、それを急に「鬼畜」とよばせ、思はせ、行はせるのは如何にや。英米にまけてたまるか……」の下品な強がり、「まけるものか」と芝居よろしくの身振り大げさにするは弱虫にかぎるが普通に候はずや、あれやこれや、言ふもいやに候へども、次々に日本人の神性を下劣化する広告のやうな標語を次々に製造し、紙の不足な現状なるに、半紙にかゝせてベタ／＼門口に張らせるが、当地方の小学校の先生の仕事なるは困つたものにて候。「このノートは闇では五十枚ですよ、だから大事に使ひなさい」と訓辞する先生なればかゝる仕事も無反省になすものに候べし。何しても当局の中枢が大正時代の教育の産物なることが禍の根本と

存じ候。これでは「八紘一宇」の精神が西洋人は勿論東洋人にもわからぬが必然。摂受に裏づけられし折伏の剣がこの大東亜の聖戦なること、可哀そうなる故にこそ振ふ破邪開悟の剣なることがわかつた日本人いかほど有之候ぞ。戦と共に日本人の本当の教育をやつて行かねばならぬ日本の現実には中々の大事業にて候。書きゆけば限りもなく候ま、この辺にて擱筆仕るべく候。先般御ゆるしを得たる賢治様の撰折御文の件、以上の如き現代なれば益々必要に候ま、先考三周忌・とし子成仏の記念に是非出版させてもらふべく、百方努力せるも、印刷は絶対不可能に相成り候。せめて謄写版にてと只今工夫中、本文を及ばずながら、校合するべく大蔵経や御遺文と比較校正いたし居候。お蔭にて不勉強なる自分に益するところ少なからず候。

御心配かけ候愚妻の病氣も、今はねたり起きたりとなり、元來氣の問題に候ま、一陽來復の陽春と共によろしきが如く候、御安心願上候。来る廿一日の彼岸の中日にはその床上と、とし子の満中陰、当地で最後の賢治さんの会と一石三鳥に、御惠贈の物資にてお萩をつくつて供養する筈、子供らは指折りかぞへてよろこび居候。重ねて御礼申上候。清六様に何卒よろしく願上候。乍末筆、御老体御大事に祈上候 敬具

★

三月十七日出の御文難有快心の思にて拝誦仕候

奥様の御病氣のミハ心掛りの御事ながら切に御快復の程祈上候 此度は又上級の学校に御勤めの由喜上候 御骨折もある事ながら御奉公甲斐もある御事と存候 切に御自重祈上候

今日は御彼岸の中日に有之御天氣も殊の外宜しく此間の天愁地慘と云ふ様な陰鬱さハとれ誠に快適な御天氣に相成り候 雪ハそれでもまだ二尺以上あり野山の春ハ尚遠く被存候 左りながら自然ハ人間の様にうそハなく候間不日春らしく相成る事と存候 偏に農作善く食料に困らぬ様に今より念願致し居る次第に候

今日の彼岸会に付仏前にて思はせられたる事を御聞きに達したき思ひより一筆申進候 誠に世界ハ唯心の所造の候事ハ仏説の確固たる処少しく因縁の善き処あれバ卒直に信じられて善く候処を今の様にまで暗く相成り候事ハ誠に末法と云はるゝ、所以とも存候

一念五百生繋念無量劫とも承り候へバ因果の深くして又慎しむべき慄然たるを禁じ得ず候 思へバユダヤも哀れな国民に候 幾千の昔に祖国を失ひ他国に漂浪してハ迫害を受け積りくゝ怨恨が陰性に背屈して報復を考へ民力に乏しき処を資財と陰謀にて深酷な報復を期図しそれが現はれて

今の世相となりしものと存候 其中にも又報復の種類の変わり目も見られ長き月日葛藤と迫害を経過せしバルカン地方や独塊地方蘇聯地邦ハ被害は甚大に直接の交渉ハなくも東洋も又累を被りしハ共業所感にもあり末法にもあり各自の因果にてあるべきも我日本の現状の如きハ正に開闢以来の国難に当面したる事ハ遺憾限りなく候も別業ハ又各別と存候 我国に關する怨念ハ個々人よりハ寧ろ国体にあらむ

嫉妬感こそ深きものにあるぞやとも存候 左ればこそ我国民の崇敬する処の神仏を否定せしめんとし唯物物のミが力なる如く信ぜしめ一応地上を唯物物の支配に置きたる後彼等の神を其上に君臨せしめんとする陰謀と見られ其怨念の深酷にして長久なる事真に度し難きものたるを覚へ候 左りながら天地の間にハ必ず正理あり彼等邪惡の企てのミ成功すべき所以もなく必ず覆りて天地明朗なる時もあるべきか 只其時期を早め邪を去り正に帰せしむる為め正しき教と強き意力と智恵とによりて速に覚醒せしむる覚者あらバ其功德ハ正に無上のものたるべく存候

米英鬼畜と云ふかはりに哀れなる怨念の幽鬼と云ふ見方によりて済度するならば無上の功德自他共に益するものと存候 切に其人の（其仏の）出現を祈るものに候

その間に数々の甘き毒を盛りて或ハ釣り或ハ網しあらゆる誘惑の下に地上の人間を惑乱せし罪深き所業にも必ず近き

報ひのあるべきハ疑ひもなく候も今の急務ハ多少でも覚醒せしもの（毒の醒めかゝりしものより）より唯物の毒に染まぬ様自他戒心の要殊に切なる時と存候
まづハ右まで粗書啓上仕候 敬具

宮澤政次郎拜

三月二十一日昼

小倉豊文様

☆

御元氣溢る、お手紙にて安心致しました。此の戦場で「太子鑽仰」御発行、またいろいろの菩薩業に御精進なされまことに力強く有難く存じ居ります。

「土塔」わざわざお送り下されました由、また原稿や「太子鑽仰」お送り下されました由、厚く御礼申し上げます。写真「農民芸術概論」二種類お送り致す筈でしたが製作所も非常な多忙の為遅れてゐます。

近日お目にかけますから御批評下さい。

本日お送りしましたお曼陀羅の中、薬師寺の日光菩薩像を用ひましたことについて私は非常な不安を感じてゐますが、私の手元にある写真の中でその立派さや氣品に於て、一番と思つたのであります。どうか御遠慮なく叱正下され、適当な像（また像を入れない方がたしかに正しいかもしれ

ません）をお知らせ下さい。

前の「塔建つるもの」はお同意はいたしましたが、徳を却つて傷つくるものにあらずやとも思つてゐます。ともかくいろいろ間違ひだらけで、時々強くやられなければ知らないでゐます。また書きます。

〔備考〕

〈消印〉花巻／20・3・21／〔？〕手県

〈用箋〉政次郎部分（十二行野便箋四枚）、清六部分（十四行野便箋三枚）

〈筆記具〉政次郎部分（十二行野便箋四枚）は鉛筆、清六部分（十四行野便箋三枚）はペン。

*宛名および差出人住所氏名は墨・筆（政次郎筆）

17 昭和二十年四月十三日・封書〔封〕

〔表〕兵庫姫路市

鷹匠町甲ノ三四

小倉豊文様

直披

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和貳拾年四月十三日

御元氣にて御過し之趣喜上候 今日は当地久し振りのお天氣に御座候 併昨日は又福島地方來襲ありし由東北も安住の地でハなく相成候 危急存亡とハ形容でなく現実之事と相成候 疎開者は毎日入り来る各自の衣食住ハ不及申生命さへも保証出来ぬとなれば正に言語文字を超へた非常時なからそれが其まゝ生きたものゝ上に示された実体であり何千年の昔からの聖者の警告今こそ真なると知る遅蒔の夢覺むるもの多かるべく候

こちら側の指導者の愚かより今に至りても尚緩手のミ打ち情けなき状態に候へ共攻防共に相對である事なればこちらの勞れた時向ふにも相當の勞れあり米の方も百万以上の死傷ある事を認め欧州にてドイツを苦しめ居るソ聯等も或ハ千万級の死傷を出し居るかも知れず内容の点では樂に感じ居るものハなかるべく存候 民俗の亡びるの亡びぬとハ精神力の上に懸かるものと存候 二千年の昔國家を失ひしユダヤの怨靈が今陰約にも地球上の覇者たる事疑ひの余地なきを思へバ因果の理法只恐懼の外なき事に候 戦争もこゝまで來れば只物のミにて戦ふ次第でなく人の方ハ更に々々重大の事なれば尤も激烈と見ゆる時歴史ハ已に轉換に入りしものとも先走れば見らるゝ事にも存候 登山者も頂上近

くして却て胸突き八丁と云ふ場所もある事と存候

此点でハ頑張りくらべ又止むを得ぬ事と存候 爆撃が國民の間に普遍に認識せらるゝ時此國民性ハ必ず強くなる事を確信仕候 よしや生活ハ如何に不自由でも必ず忍び得る事我國婦人の氣分にて察し得らるゝ処に候 是れハ地方にありて見て尚更婦人の忍耐性強き事と（少数都會生活者やありしき意味の智識階級を除き）純にして健やかなる國民意識を持ち居る事など男性の遠く及ばざるものあるを見て日本決して亡びずとの確信を強め申候 昭和育ち昭和生れの子の純なる殉國魂も此母性あればこそと今更國体の淵源深きを感じずる事に候 是れに對照して残念に思はるものハ明治初頭よりユダヤ教育を無批判に取り入れたる智識階級尤も指導者階級と思はるゝ人々の教へ及家風の不覺なる事も言語同断と思はるものあり極限すれば或ハ売國の徒もなしと云へぬ様の意氣地なき言動が此階級（別て医者とか俗に云ふ者のつく階級）に多く見聞せられ候事ハ遺憾極りなく覺へ候 過去の惡夢ハ追ふも詮なし今ハ只不覺の夢を一擲して懺悔慚愧の思ひより眞の國民魂ひを振ひ起し過ぎし罪障消滅の爲めにも専心御奉公の一途に励む様あり度き事と存候 ユダヤの思想と生活の上陸ハ明治の初めより初まりし事と思へバその遠くして深き今にして荒療治を経ねバ起死回生のとれぬ様になりし事遅まきでもあり遺憾でもありな

から皇天皇土尚古の国家人民を慰救せらるゝものと信じ申し候

人心結ばれ晴れくせぬ事ながら大自然ハ正直に氣候も宜敷花と開き候事と存候

愈々御自重御自愛御家族皆様と共に御健全に一日一日此〔危〕局を御過し遊ばされ回陽の日を御待ちある様切望此事ニ候 勿々敬具

四月十三日

宮沢政次郎 拝

小倉豊文様

侍史

〔備考〕封書、和紙封筒

〔消印〕花〔?〕／〔?〕0・4・13／岩手〔県〕

〔用箋〕6に同じ、三枚（六面）。

〔筆記具〕墨、筆

*上下に「宮澤」の朱印（二カ所）。

18 昭和二十年四月二十五日・封書〔封〕

〔表〕兵庫県姫路市

高等学校内

小倉豊文様

親展

〔裏〕岩手県花巻町

宮沢政次郎

昭和二十年四月二十五日

日々格別之御障りも無く御過し被遊候哉 清六ニ被下候御書面ニヨリ御身分ノ御異動御家族様方ノ御散在之御事殊に幼き御子様の上に懸る御心使ひ御察申上候

左りながら今の世相にハ少しも珍らしからぬ事柄にて私の知る当地辺にも何程も見受らるゝ事にて止むを得ぬ時代相と存候

誠に有為転変今日にして明日を計られぬ事遺憾至極之事ニ候

なれど今まで苦勞之足らざりし我國民が此時局に鍛へられて強く建直しの機会を与へられ候事と思へバ苦難も又恩恵と感ずる時もあるべく何れハ人事の尽し候所に一毫も違はぬ因果の支配ある事と存候

何卒皆様共御健やかに御心裕かに此時局を一日一日の御辛抱之覚召にて御過し被遊候念上候

昨日は又参玄洞様の令嬢より御手紙有之父上病氣により大和の郷里に御返りありし由御報有之候 多年の都会住居に風塵に疲れられし御為めとも被存候 切ニ御自重御自愛を

望上候

三界無安ハ文字でハなく真実当面之問題となり毎日業火の来襲を受る国となりし事 明治大正の種蒔きの悪しき為めとハ云へ箇々心の中にある我儕がかく迄の果報を招く事慢貪瞋の報ひかく迄恐ろしきものと今更に知るも愚病之限りに存候 戒慎恐懼せめて後來の惡果を招かぬ様と只管念願之外無之候

今の身辺の御事情を察上候へバ誠ニ鬱陶敷御事と存候へ共離合集散も時ありて人事にハ致方もなくそれも悪しき事のミにハあらずして心得さへ堅確なれば必ず後の良果ともなる事と存候間皆様にその御心構ある様重て奉念願候

勿々たる世の中ながら東北の春も寒きながら漸く農耕之季節と相成候 人の心も落ち付かぬながら花も段々開いて来る事と存候 我此土安穩の覚召にて益々御信念の豊かさを祈上候

所詮は箇々心の乱れより今の世相を惹起し候事なれば此収拾も又本を整へる外なく今我々の立場ハ火宅に嬉戲する頑童の漸く父の呼声を聞き初めし程度の事なればせめてハ群童にも其危険を告げる位が山に候へ共少しにても其危ふさを氣付きし上にハ一人なりともの思ひ堪へ難く存候 教父の呼声ハ古昔より正覺大音響流十方とあれども盲瞽瘖瘂には力及ばず偏に大力の偉人の出現を望む次第に候

ドイツも遂ニ清算期来り力を頼みしもの、末路哀れに存候

それを真似せし我国も似た処まで来た事ハ残念に存候

只此国に残りし一縷の福業を頼む外なき事に候

驕れるもの、末路も察するに難からず清算期の事とて其報

ひの迅速なる事又眼前の事なるべく候

何れにせよ五濁の世相我人共に氣の毒の事自らを自戒自責

して悔を残さぬ外致方なく候

先ハ拙筆御見舞いを兼て申上候

勿々敬具

四月二十五日

宮沢政次郎拜

小倉豊文様

侍史

〔備考〕和紙封筒

〔消印〕花巻／20・4・25／岩 手〔県〕

〔用箋〕中質紙、半紙大一枚表裏、およびその半裁一枚表

裏（半裁ずつノンブル付き、計6頁）

〔筆記具〕墨、筆

*裏上下に宮沢の朱印

（くりはら あつし・実践女子大学教授）